

聖書:ルカの福音書16章1～14節

説教:神と富す

はじめに

まず最初におことわりしなければなりません。本来ならば、牧師がここに立ってみことばの取り次ぎをしなければならないのですが、今朝は原稿を代読していただくという形をとっております。その理由についてですが、先週、牧師と同居している家族の一人がコロナに感染したことが判明し、そのため牧師は濃厚接触者という扱いになり、今週の金曜日まで自宅待機をしなければならなくなりました。そのため、今日はここに来ることができず、リモートで礼拝に参加しております。あらかじめご了解いただきたくお願い致します。

いま、司会者の方に読んでいただいたところですが、皆さんどう思われたでしょうか。すんなりと理解できた、納得できた、という方はまずいないと思います。聖書のみことばを理解することは、簡単ではないことはいつものことですが、今日のところは特別にわかりづらいのではないのでしょうか。意味がわからないというのを飛び越えて、常識とはまったく正反対のことが書かれているとしか思えませんから、頭がクラクラしてめまいがしてくる、そういう方もいるかもしれません。もしそう思われた方がいたら、自分だけがおかしいとか、頭が悪いと思わないで、どうか安心して下さい。聖書の専門の学者さんたちでさえ、この箇所は難しいと言って、頭を抱えているくらいですので、わからなくて当然なのです。

そんな難しい箇所をこれから取り上げていきます。いつもの牧師のことだから、たぶん、まったく思いもつかないことを今日も言い出すのではないかと疑っておられるかもしれません。果たしてどんな結末になるのか、期待しながら、あるいは眉につばをつけながらでもいいですから、聞いていただきたいと願います。

## 1 不正な管理人

### 1) 訴えられる

今日のところは、イエスが弟子たちに一つのたとえ話を語る所から始まります。それはこんな内容でした。1節の真ん中から2節までを読みます。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この管理人が主人の財産を無駄遣いしている、という訴えが主人にあった。主人は彼を呼んで言った。『おまえについて聞いたこの話は何なのか。会計の報

告を出しなさい。もうおまえに、管理を任せておくわけにはいかない。』」

この管理人がしたことを今ふうのことばで言い直せば、会社の会計をごまかしてその一部を自分の財布に入れる、いわゆる業務上横領のようなことだったのかもしれませんが。あるいは、取引先から賄賂をもらって仕事上の便宜を図り、自分の主人の利益を損なう、いわゆる収賄というようなことだったのかもしれませんが。いずれにしても立派な犯罪です。主人は会計帳簿を提出させ、この管理人に不正があったことを確認した上で、懲戒免職にしようとしています。

### 2) 債務の減額をする

ここまではどこにでもありそうな話ですが、問題はここ先です。4節を読みます。「分かった、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、人々が私を家に迎えてくれるようにすればよいのだ。」

仕事を失ったら、その日からどうやって暮らしを立てていくか、大きな問題です。いまさら肉体労働はできないし、さりとて、これまで立派なお屋敷で管理人という地位のある立場でいたのですから、そんな自分が物乞いをするなどプライドが許しません。そこでこの管理人は、一つのアイデアを思いつきます。たとえ主人から追い出されて無職になっても、人々が「どうぞ、どうぞ」と言って家に迎えて、食べるのに困らないようにすればよい。それで早速、油百パテの借金がある人を呼んで来て、無条件で五十パテに減らしてあげます。小麦百コルの借金がある人には、それを無条件で八十コルに減らしてあげる。そんなふうに関係者にさんざんに恩を売って、自分が困らないようにしていきました。

### 3) 主人の評価

さて、この管理人のしたことは良いことか、悪いことか。皆さんはどう考えますか。答えは立場によっていろいろです。借金をしていた人たちにしてみれば、手放して喜ぶようなことですから、管理人のしたことは良いこととなります。しかし、主人の側に見たら話は全く正反対です。この管理人は、主人に損害を与えたことになるので、主人は

烈火のごとく管理人を叱りつけるだろう、そんなふうには予想するわけです。

ところが、なんと驚いたことに主人はこう語るのです。8節をお読みします。「主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。」

これを読んだらだれだって、「どうして?」「なぜなの?」「もしかして読み間違ったのだろうか?」そんな疑問で一杯になるのではないですか。とにかく、まずは気を取り直して、イエスはどのように評価されたのかを見てみましょう。

#### 4) イエスの評価

9節をお読みします。「わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」

イエスは「不正の富で、自分の友をつくりなさい」と言っております。8節もそうでしたが、これも何かの読み違いだろうかかと戸惑っていると、追い打ちをかけるように11節でもこう言われるのです。11節をお読みします。「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか。」

ここまでくると、もう驚きを通り越して、あきれかえるしかありません。イエスはこの管理人のしていることをこの上もなく高く評価していることは、疑いようもありません。「不正な管理人」と呼ばれているほどですから、どう見ても彼がやっていることは正しいことではなくて、不正なことなのです。それなのに、イエスはどうしてこんなに高く評価されるのか。まさか、不正なことをどんどんやりなさいと勧めている訳ではないはずで。

#### 2 二つのヒント

##### 1) 死んでいたのに生き返る

ここで多くの人たちはつまずいてしまいます。まるで暗い森の中に迷い込んで道が見えなくなったような感じです。こんなとき、どうしたらよいのでしょうか。迷い込んだ道から抜け出せるようにと、イエスはいくつかのヒントを残してくれています。ヒントは二つあります。

一つ目のヒントはこうです。福音書を読んでいると、いっけん、一つひとつの出来事がばらばらで、前後のつながりがあまりないように見えることがあります。ここもそうです。15章後半のところでは、放蕩息子が父の家に戻ってきたことと、父の

家で働いていた兄息子の話が出てきました。今日は、それに続いて16章の前半を開いていますが、弟息子の話もなければ、兄息子の話もなく、15章と何のつながりもなく、16章からまったく新しく始まった、そんなふうには感じます。しかし、福音書はけっしてばらばらに書かれたものではなく、すべて前後のつながりがきちんとあるものとして一つひとつの出来事が置かれています。ですから、このたとえ話も15章と関係しているように見べきではないでしょうか。

ではいったい、どんなふうにつながっているのか。難しく考える必要はありません。15章の最後のことばに目を留めてみましょう。15章32節にはこう書かれています。お読みします。「だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」

死んでいたのに生き返る。15章のテーマはなんですかと聞かれた、これですと言ってもよいくらいです。そのテーマが16章にも続いているのではないかと。これが一つ目のヒントになります。

##### 2) パリサイ人は金銭を好んでいた

続いて二つ目のヒントですが、それは14節にあります。そこをお読みします。「金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。」イエスは弟子たちに向けて話をしていましたが、それをパリサイ人たちが脇で聞いています。イエスもそのことを意識していました。そのパリサイ人たちですが、彼らが金銭を好んでいた、とあるのに注目してください。このたとえ話も、管理人が「不正の富」を得ていたと言われていて、金銭の話がからんできています。そんなふうを考えていくと、どうやらこの話は、「金銭」あるいは「富」というところで、パリサイ人と関係しているらしい、そんな見通しが立ってくるのではないのでしょうか。これが二つ目のヒントです。

まとめましょう。このたとえ話はパリサイ人と関係しており、死んでいたのに生き返る、そのようなテーマとも関係しているらしい。そんなことがわかってきました。この二つのヒントのことは、あとでまた触れることにいたします。

#### 3 解釈

##### 1) 「債務」を「罪」と言い換えてみる

このたとえ話を読んだとき、「あの不正な管理人のように、あなたがたも抜け目なく立ち回って永遠の住まいに入るよう努めなさい。」イエス

は、そんなふうと言おうとしているとしか思えません。パリサイ人たちが、イエスをあざ笑ったのもう当然だろうとさえ思ってしまう。

しかし、イエスが救いと全く関係のない話をするのでしょうか。むしろ、イエスが話して下さることばはすべて私たちの救いに関係していると考えべきではないでしょうか。というのは、この方はマリアを通して私たちのところへ人となって来られたときから、私たちを罪から救うために、ただひたすらに十字架に向かうことを目標としていたからです。

ここには私たちの救いのことが書かれている。そんな目で、もういちどこのたとえ話を見直してみたら何が見えてくるでしょう。このたとえ話に出てくる主人が、不正な管理人が賢く行動したのをほめた、とあります。いったい何が賢い行動だったのかと言えば、債務者たちを一人ひとり呼んで債務を減らしてやったこと。それが賢かったと言っています。このたとえ話のどこが一番のポイントかと聞かれたら、まさにここが重要ポイントです。それに加えて、二番目に重要なのは、その借金の減らし方にあります。普通はこうします。「あなたの持っているものを何か差し出さない。そうしたら、それに応じて借金を減らしてあげますよ。」これが普通のやり方です。ところがこの管理人はどうしたのでしょうか。なにも条件をつけません。無条件です。油百パテの債務がある人には、「あなたの証文を受け取り、座ってすぐに五十と書きなさい」と言って、有無を言わずに一方的に借金を減らしていききました。職を失っても食べるのに困らないようにという悪知恵から出たことではありますが、借金をしていた人にしてみれば大喜びです。あまりにも条件がよすぎるので、かえって「何かの詐欺ではないか」と疑いたくなるほど気前がよすぎます。

こんなことは、現実には絶対にありえません。しかしよく考えてみてください。これと似たような話、どこかで聞いたことはなかったでしょうか。わかりやすくするために、借金を「罪」ということばに言い換えてみたらどうですか。そうすると、このたとえ話に出てくる「主人の債務者たち」とは、罪を抱えてそれをどうすることもできなくて苦しんでいる私たちのことである。そんなふうな見方ができるようになります。その罪という負債が帳消しにされていく。これはまさに救いの話とそっくりです。

2) 罪がなくなったとき、永遠の住まいに迎えられる

そのことを押さえてから、次に9節のみことばを読み直してみましょう。お読みします。「わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」

ここで言われている不正の富とは、管理人が証文を書き直させて債務を減らしてやったことを指します。先ほど、「借金」を「罪」ということばに言い換えることができる、と言いました。それと同じように、9節も別のことばに言い換えたらどうなるのでしょうか。ここで言う「不正な富」とは、管理人が主人を裏切って手に入れたものですから、これも「罪」ということばに言い換えることができそうです。そうしますと、9節後半のみことばの意味はどうなるのでしょうか。そこで出てくる「富」を「罪」ということばに言い換えてみたら、こんなふうになります。「そうすれば、罪がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」

永遠の住まいとは、もちろん神の御国、天の御国のことです。イエス・キリストによって罪が赦された者たちが迎えられる場所です。私たちが罪という莫大な借金を背負って苦しんでいたときに、罪が赦されて、神の目からご覧になると罪がなくなった状態になる。その結果、永遠の住まいに迎えられる。どうですか。「富」ということばを「罪」ということばに言い換えると、9節のみことばは救いのことをそのまま語っていたことが見えてきます。

#### 4 イエス

##### 1) 不正な管理人とは誰のことか

たとえ話というのは、実際にあるものをわかりやすくするために、何かたたとえて説明する方法です。ここに出てくる主人とは、父なる神様のことで、債務者たちとは先ほども触れたように、私たち罪ある者たちのことを指す。そこまではすんなりとわかると思います。

そこで問題です。不正な管理人とは誰のことを指すのでしょうか。「不正な」とあるので、どうしても悪い人のことを思い浮かべてしまいます。しかし、今見てきたとおりに、この管理人が債務を無条件で減らしてやったことで、債務者、つまり罪ある私たちは救われていったという流れが見えてくると言いました。そうしますと、意外なことかもしれませんが、この不正な管理人とは、救い主であるイエス・キリストのことを指すと考えられないでしょうか。

こんなことを言いますと、皆さんは驚かれたと思います。でも、もしもこれが正しければ、8節で主人が「不正な管理人が賢く行動したのをほめた」と言ったのは何もおかしいことではなくて、むしろつじつまが合うのではないですか。

## 2) 「不正の罪に忠実である」とは？

それでもまだ疑問が残っています。11節はどうなるのでしょうか。「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるのでしょうか。」

「不正な富に忠実でありなさい。」このままでは意味がまったくわかりません。でも先ほどのパターンに従って、「不正な富」を「罪」と言い換えたならどうなるでしょう。「罪に忠実でありなさい」となります。ここで新たな疑問です。「罪に忠実でありなさい」とは、「忠実に罪を行いなさい」ということなのか。もちろん、そんなはずはありません。

先ほど一つ目のヒントとして、今日の箇所と15章の放蕩息子の話とつながっているとしました。放蕩息子は、父親の深い愛に触れたとき、心からあふれ出るようにして「私は天に対して罪を犯しました」と告白したことを思い出してください。「罪に忠実でありなさい」というのは、まさにあの放蕩息子がしたように、自分の罪を告白することではないのでしょうか。もしもあなたがあの放蕩息子のように、罪に忠実で、罪を告白できるなら、あなたにまことの富をまかせることになる。すなわち、永遠の住まいに迎えられる。そういう意味になります。

最初はさっぱり意味がわからなかったたとえ話でした。けれども、こうやって見てくると、実はなんにも奇抜なことを言っているのではなくて、イエスが与えてくださった救いのことを述べていたのだと気がつきます。

## 3) 金持ちは救われないのか？

では最後に13節のみことばの意味を考えます。お読みします。「どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」

イエスは、パリサイ人たちもそばで聞いているのを意識しながら語っています。ここで初めてわかることですが、そのパリサイ人たちは金銭を好んでいました。そうしますと、13節は、パリサイ人た

ちに向けられたことばであると考えてみたらどうでしょう。パリサイ人たちは自分たちこそ神に仕えているというプライドを持っています。ところが一方では金銭を好んでいるのですから、イエスに言わせれば、それは神と富という二人の主人に仕えようとするもので、それは絶対にできない。そんな批判だったのです。

それはよいとしても、私たちはこれを聞いてどきりとしめます。クリスチャンはお金をほしがってはいけないというのでしょうか。あるいは、たくさんのお金を持っていたら、天の御国に入れない。クリスチャンはお金を持つてはいけない。そんな意味なののでしょうか。そんな不安を感じた方が少なからずおられると思います。

はっきり言いますが、イエスはそんなことは言っていない。そもそも、このたとえ話の主人は金持ちだったとあります。もし、金持ちは救われませんと言うことを言いたいのなら、まっさきに主人のほうをさばかれなければならないはず。ところがそんな話は一切出てきません。

このたとえ話が言いたいことは、富があるとか、金持ちであるとか、そんなことではありません。不正の富に忠実であるかどうかのポイントです。すなわち罪に忠実であるのか、自分の中にある罪を正直に告白できるのかどうか。そのことをイエスは言おうとしています。

パリサイ人のことを見てください。彼らは、自分たちが金銭を好んでいるということを絶対に認めようとしません。むしろ、他人の罪を指摘して他人のことをさばっていました。彼らこそ不正の富に忠実でない人たちである。イエスはそのことをこのたとえ話で指摘しようとしたのです。

## 4) 不正であるとさえ思えるほどの救い

でも皆さん思いませんか。「そういうことを言いたかったのなら、もっと別のたとえをしたらよかったのに。だいたいイエス・キリストが不正な管理人だなんて、だれも思いつかないじゃないですか。」

救い主が、犯罪まがいのことをした人間にたとえられるなんて、とても信じられない。私も最初はそう感じていました。しかしどうでしょうか。イエスが私たちの罪と呼ばれる債務、借金をゼロにしてくださって、私たちを罪から解放してくださったのです。イエスがなさったことは、不正な管理人がやったこととほとんど似ている。よく考えてみると、イエスがなさったことはそれほど常識からかけ離れていることだったのです。

そもそも、私たちの手にあるものはなんですか。神に言わせれば「不正の富」しかなかったのです。罪というものしかありませんでした。しかし、もし私たちが自分の罪を告白するのなら、私たちは本当の富である永遠のいのちをいただくことができる、というのです。それには何か条件があるのでしょうか。いいえ、何もありません。なにしろ、神は「不正な管理人」と呼ばれるほどに徹底的に不公平ですから、条件無しで罪を帳消しにしてください。そのためにこの方が十字架でいのちをお捨てになられました。

不公平とも言えるような、誰も思いもつかない方法で救って下さった主の御名をあがめたいと願います。